

## 旅寝の夢 その1——勅撰集羈旅歌の類型——

今 関 敏 子

キーワード 羈旅歌 夢 制度 類型

### 要 旨

鎌倉期以降盛んに書かれるようになった紀行には、歌枕訪問・都回帰という類型がある。旅というものに目的があり、都を拠点とし、都を出発して都に帰る旅だからこそ可能な類型である。和歌表現の場合、散文以上に、制度的な枠組みが強い。旅する主体が詠むというより、都という場で題詠された勅撰集の旅寝の夢の表現には、散文よりさらに顕著な都回帰の類型が見出せる。これは形骸化というよりも旅の表現に関する日本文化の特質であろうと思われる。

### 1、はじめに

旅人は道中で様々な夢を見ることであろう。旅寝ならではの、という類の夢もあろうが、そうではない夢も多々あろう。

鎌倉期以降、京と東国の交易・交通が盛んになると、紀行

が多く書かれるようになる。かつてプルチヨウは、

由緒ある旅のイメージや「歌枕」を重視する日本の紀行は、距離・費用・宿の質や食物、そして船の便に関する情報などを含むヨーロッパの参詣記とは大きく違っており、むしろフィクションの世界に属するものであった。それゆえに日本の紀行は形式と内容が伝統に忠実であれば、たとえ現実に旅にでかけなくても、家で想像上の旅行記を書くことは決して不可能なことではなかったのである。

と論じた<sup>①</sup>。無論、全く旅をせずに書かれた紀行はないが、日本独自の旅の文化という観点でみるならば理論上可能である。確かに、伝統的類型さえ踏襲すれば仮構も可能な平安鎌倉期の紀行には、ガイドブックにもなり得る西欧の紀行のような実体験にもとづいた実用性、旅人の個性は稀薄である。

紀行の表現には歌枕訪問、都回帰が不可欠な要素であった。歌枕では故事や古歌を踏まえて歌を詠む。故郷である都を存在の基点とする旅人たちは、往路は都を離れることを悲しみ、

道中望郷の念を抱き続け、帰路は都に近づくことを喜ぶ。行く先に期待する躍動感には紀行にはほとんどみられない。都を出発して都に帰るのが旅であった。現代の観光にあたる物見遊山が旅の主流になっていくのは、近世中期以降である。それまでの旅には必ず目的があった。このような制度的な旅と、制度を逸脱し拠点を失った果てのあてどない流浪は一線を画する。<sup>②</sup>

既に『伊勢物語』東下りと勅撰集を比較して論じたように、勅撰集の羈旅歌に定着したのは、制度的な旅であり、旅人の拠点である都への望郷の念の強いものであった。本稿では、そのような特質を持つ羈旅歌に旅寝の夢はいかに表象されているのかを考えてみたい。

## 2、勅撰集の羈旅歌と夢の傾向

勅撰集の羈旅歌に心躍る旅の気分が詠まれることはまずない。旅を楽しむ余裕よりも、心細さ、孤独、寂寥の表出がほとんどである。そこには明らかに都から離れた時間と距離を測って嘆くという類型がある。二十一代の『新統古今集』になると、旅は辛いものという捉え方がやや稀薄になるが、旅の情趣は寂寥と望郷―都回帰を基調として詠まれてきた。都回帰は歌枕訪問に並んで、まさしく散文の紀行の類型に重なる。

勅撰集の羈旅歌・旅歌については、安田徳子に先行研究がある。<sup>③</sup>安田は羈旅歌において『拾遺集』から見出すことの出来る題詠が、『千載集』以降、主流をなし、「自己の体験の代わりにはしばしば古物語や故事あるいは古歌の世界を利用した」こと、「実詠の減少とともに、羈旅歌は全く形骸化してしまった」<sup>④</sup>ことを指摘している。

二十一代集中、「夢」の語が含まれる羈旅歌は75首（表Ⅰ）。「離別」「別」は、旅の別れとして、羈旅歌の直前にある部立である。ただし、不可欠な部立ではなく、『新勅撰集』『続後撰集』『続拾遺集』『玉葉集』『続千載集』『風雅集』にはない。また、『拾遺集』『金葉集』『詞花集』には羈旅歌・旅歌の部立がないが、「別」の部立はある。羈旅歌・旅歌は『千載集』以降、勅撰集に欠かせぬ部立として定着したのである。旅の歌の変遷史上、『千載集』は重要な位置にあると言えよう。

興味深いことに、「夢」が初めて羈旅歌に詠み込まれるのも、『千載集』なのである。『千載集』以降、羈旅歌・旅歌の部立には、必ず夢を詠み込む歌が掲載されるようになる。

- すなわち、『千載集』から、
    - i 羈旅歌が部立として定着し、
    - ii 題詠が主流になり、
    - iii 夢が詠まれ始めたのである。
- 恰も紀行が多く書かれる時代の到来を見通すような平安末

旅寝の夢 その1

《表Ⅰ》

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	全体
別国歌大観番号	離別歌 365	離別歌 1304	離別歌 301	別部 461	別部 334	別部 172	離別歌 476	離別歌 857	離別歌 497	離別歌 857	離別歌 819	離別歌 819	離別歌 532	離別歌 532	離別歌 532	離別歌 528	離別歌 735	離別歌 735	離別歌 736	離別歌 844	離別歌 881	離別歌 913
歌数	41	46	53	34	39	16	22	39	22	15	25	16	39	22	22	27	27	22	22	22	33	33
羈旅 国歌大観番号	羈旅歌 406	羈旅歌 1350	羈旅歌 1367	羈旅歌 500	羈旅歌 535	羈旅歌 535	羈旅歌 498	羈旅歌 498	羈旅歌 896	羈旅歌 494	羈旅歌 896	羈旅歌 494	羈旅歌 1275	羈旅歌 494	羈旅歌 494	羈旅歌 662	羈旅歌 553	羈旅歌 553	羈旅歌 1104	羈旅歌 553	羈旅歌 662	羈旅歌 914
歌数	16	18	16	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
夢を含む 羈旅歌	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
中の%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%

期の勅撰集『千載集』である。しかし、i ii iiiの現象は、勅撰集に詠まれる旅寝の夢のほとんどが実際に旅をする主体がみた夢ではないことを示している。

3、勅撰集実詠における旅寝の夢

まずは数少ない実詠の羈旅歌において、夢がいかに表現されているのかをみていこう。「夢」の語を含む実詠歌は、『新古今集』3首、『続後撰集』1首、『新語撰集』1首、『続千載集』2首である。このうち、『新古今集』を除く例はすべて贈答歌である。

I 贈答歌

実詠の贈答歌4首は次の通りである。

《続後撰集羈旅歌》夢を含む羈旅歌6首中の1首。

寂昭上人入唐時つかはしける 性空上人

1279 ゆめのうちにわかれてのちはながきよのねぶりさめて

ぞ又はあふべき

この世を夢と観じる仏教的発想である。

《新後撰集羈旅歌》夢を含む羈旅歌6首のうちの1首。

こしに侍りける比、中務卿宗尊親王の許に申しつか

はしける 参河

563 おもひやれいくへの雲のへだてもしらぬころにはれ

ぬ涙を 返し

中務卿宗尊親王

564 うくつらき雲のへだてはうつつにて思ひなぐさむ夢だにのみみず

現に対立するものとして夢を詠む。

《続千載集羈旅歌》夢を含む羈旅歌11首のうちの2首。

前大納言為氏、あづまへ下りて侍りけるが、のほり  
侍りける時、申しつかはしける 源義行

851かへるさの旅ねの夢にみえやせんおもひおくれぬ心ばかりは

返し 前大納言為氏

852かへるさにおもひおくれぬ心とも旅ねの夢にみえばたのまん

以上の贈答には、いずれも旅人と都に残る者の交情が表出されている。互いの距離を嘆くのは、離別歌の典型である。

子 関 敏 今  
これらの歌が載る歌集には、離別歌・離別・別・別部という部立がないという共通点がある。従って、本来離別に分類されるべき歌が羈旅の部立に入ったものと考え得る。

Ⅱ旅人の実詠―『新古今集』

となると、旅の夢の実詠は『新古今集』に載る3首のみと  
いうことになる。『新古今集』では、夢を詠む羈旅歌6首の  
うち、半数が実詠である。『千載集』では「夢」の語を含む  
羈旅歌全3首が題詠であるのに対して、逆行現象ともみえる。  
ただし、これら3首は、実詠とはいえず、同時代進行の旅にお  
けるものではない。既に故事となつてゐる。古典を愛好する  
時代の空気が投影してゐるのであろう。この後、勅撰集に実

詠の旅歌は多少見出せるものの、実際に旅をした主体が夢を  
詠み込んだ歌は皆無である。『新古今集』の例を順にみてい  
こう。

i するがのくにうつつの山にあへる人につけて、京につ  
かはしける 業平朝臣

904するがなるうつの山辺のうつつにも夢にも人にあはぬな  
りけり

旅の途中で都人に便りをする。宇津山を「現」にかけ、「夢」  
を引き出す。宇津山は、歌枕として、後代の題詠の規範となつ  
た。

古来、日本人の旅には、探検、冒険、開拓という要素が稀  
薄である。その理由として、まず、気候や地形が、旅人にとつ  
てはそう過酷ではないことが挙げられよう。大陸と異なり、  
日本には地平線が見渡せるような、どこまで行つても果てし  
ない広大な砂漠や草原といったものはない。また、すべての  
旅人が越えねばならぬ険しい山や谷、大河もない。比較的温  
暖で、程よい起伏に富んだ風光明媚な地形だからこそ、歌枕  
のような文化が醸成されたのである。

周知のごとく、『新古今集』904番歌は『伊勢物語』九段に  
重なる。

○伊勢物語

ゆきゆきて駿河の国にいたりぬ。宇津の山にいたりて、  
わが入らむとする道はいと暗う細きに、つたかへでは茂  
り、もの心ばそく、すずろなるめを見ることと思ふに、  
修行者あひたり。「かかる道はいかにかいまする」とい  
ふを見れば、見し人なりけり。京に、その人の御もとに  
とて、ふみ書きてつく。

駿河なる宇津の山辺のうつつにも

夢にも人に逢はぬなりけり<sup>⑧</sup>

『伊勢物語』には、詠歌状況（傍線部）が詳しく述べられて  
いる。すなわち、はるばる遠い国へ旅し、駿河の国に着い  
た。これから踏み行く道が鬱蒼と暗く、葛楓が生い茂り、恐  
ろしい目に会うのではないかと不安であったが、そこで知り  
合いに会ったのである。散文は和歌に重層性を与えている。  
現にも夢にも恋しい人に会えないのだが、道中の詠歌状況そ  
のものに寂寥感がある。しかし、どのような状況で人に会い、  
文をことづけたのかは、『新古今集』詞書には書かれていな  
い。『新古今集』詞書にみる限り、現実の旅の困難さ、不安  
感、恐怖感は読み取れず、都へ向かう心情が示される。そも  
そも、『伊勢物語』の昔男の旅は、制度を逸脱した流浪であつ  
た。都という拠点を失って東国へあてどなく下るのである。  
勅撰集詞書には、逸脱と流浪の悲劇性が捨象され、制度的な

旅へと造型されていく過程を見ることができ<sup>⑩</sup>る。

宇津山が二十一代集に詠まれるようになるのは、『新古今  
集』以降の16首である。『新拾遺集』819番歌（露しげき葛の  
しげみを分越えて岡べにかかる宇津の山道）、『新続古今集』  
952番歌（昔だに昔といひし宇津の山越えてぞ忍ぶ葛の下道）  
をのぞけば、すべて実景歌ではない。夢が詠み込まれるのは、  
宇津山を踏まえた勅撰集の題詠14首のうち『新古今集』904番  
歌を含め6首である。

981 旅ねするゆめちはゆるせうつの山せきとはきかずもる人  
もなし  
《新古今集》

915 ふみわけしむかしはゆめかうつのやまあととも見えぬつ  
たのしたみち  
《続古今集》

818 嵐ふくたかねの雲をかたしきて夢路も遠しうつの山越  
《新千載集》

818 都おもふうつの山道こえわびぬ夢かたとどる心まよひに  
《新拾遺集》

959 うつの山月だにもらぬつたのいほに夢路たえたる風の音  
かな  
《新続古今集》

宇津山は夢と結びつく歌枕として定着した。その過程で制  
度を逸脱した昔男独自の悲哀は捨象され、夢のイメージと望  
郷の念が結びついて幻想的な表現となる。旅の経験がなくと  
も宇津山の情趣を人々は共有しているのである。

ii

亭子院御ぐしおろして、山山寺修行したまひける  
ころ、御ともに侍りて、和泉国ひねといふ所にて、  
人人歌よみ侍りけるによめる  
橘良利

912 故郷のたびねの夢に見えつるは恨みやすらむまたとは  
ねば

同歌は、『大和物語』第二段に次のように載る。

帝、おりゐたまひて、またの年の秋、御ぐしおろした  
まひて、ところどころ山ぶみしたまひて行ひたまひけり。

備前の掾にて、橘の良利といひける人、内におはしまし  
ける時、殿上にさぶらひける、御ぐしおろしたまひけれ  
ば、やがて御ともに、かしらおろしてけり。人にも知ら  
れたまはで歩きたまうける御ともに、これなむおくれた  
てまつらでさぶらひける。「かかる御歩きたまふ、い  
とあしきことなる」とて、内より、「少将、中将、これ  
かれ、さぶらへ」とて、奉れたまひけれど、たがひつつ  
歩きたまふ。和泉の国にいたりたまうて、日根といふ所  
におはします夜あり。いと心ほそうかすかにておはしま  
すことを思ひつつ、いと悲しかりけり。さて、「日根と  
いふことを歌によめ」とおほせごとありければ、この良  
利大徳、

ふるさとのたびねの夢に見えつるは恨みやすらむ  
またとはねば

とありけるに、みな人泣きて、えよまずなりにけり。そ  
の名をなむ寛蓮大徳といひて、のちまでさぶらひける。<sup>④</sup>

橘良利は亭子院が出家されるや自らも剃髪し、修行に随行し  
た。都を離れ、世を忍びつつ歩くうち、和泉の国に到る。「日  
根」を「たびね」に詠み込んで、一首を詠むという趣向で詠  
まれたのが、「ふるさとの…」―旅先で住み慣れた都が夢にみ  
えたのは、故郷の人が恨んでいるからだろうか、もうずっと  
帰っていないので―詠である。一首のすばらしさに、人々が  
感動のあまり泣いて、続く歌は詠まれなかった。

歌物語の醍醐味は、歌のもつ共感性であり、歌の影響、効  
果の表出であろう。『伊勢物語』九段を例に取れば、八橋で  
は「唐衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をし  
ぞ思ふ」に人々が感動して泣く、「かれないひの上に涙おとし  
てほとびにけり」。隅田川では「名にしおはばいざこととは  
む都鳥わが思うふ人はありやなしやと」に同船の人々が感動  
して泣く（「舟こそぞりて泣きにけり」。まさに古今集仮名序  
にあるように、「力をも入れずして」人々を感動させる。東  
下りの場合は流浪の身の昔男独自の事情、特殊性ゆえに、人  
を惹き込むのである。<sup>⑤</sup>

『大和物語』の旅もまた、特殊な状況である。誰でもが経  
験する旅ではない。この場合も『伊勢物語』同様、物語に描  
かれる旅人の背景こそが、歌の奥行き、独特の情趣を醸し出

す。しかし勅撰集詞書は簡潔である。短い詞書は、説明に縛られぬ分、想像を自由にし、歌の解釈の範囲を広げる場合もある。また、背景に対するイメージを助けるものがないので、きわめて限定した解釈にとどまる場合もある。『新古今集』912番歌の場合、『大和物語』に表出される共感性、悲劇性、旅の独自性、特殊性を詞書には読み取り難いものではあるまいか。焦点は望郷に絞られて享受されていく。

iii しきつのうらにまかりてあそびけるに、ふねにとまりてよみ侍りける 実方朝臣

916 ふねながらこよひばかりは旅ねせむしきつの浪に夢はさむとも

同歌は『実方集』7番歌に「しきつといふところにて、ふねにて日くれにければ」の詞書で載る。心細い旅寝とはいえ、この旅は長旅でもなければ都を捨てたという状況でもない。悲劇性はまったくない。安眠出来ず、夢が覚めてしまうとしても一晩だけのこと。珍しい舟中の旅寝を楽しんでもいるのである。住吉詣の帰りに逍遙したと思われる遊びの要素が強い。実方の時代の貴族たちのしばしば経験した旅寝ではなかったろうか。

i ii iiiの旅の状況はそれぞれに異なるのだが、共通するの

は、旅人の意識が都に向かっているという点である。iiiの916には、状況から当然ながら都恋しさは稀薄である。しかし、都という帰属する場があることが前提の浮き寝である。このことは看過できないだろう。『新古今集』実詠の夢に特徴的に示されるのは、都回帰である。そして、これは題詠に踏襲されていく。

#### 4、勅撰集題詠の夢の類型

『新古今集』実詠歌の旅寝の夢が、哀感と寂寥感に満ちており、その夢に都回帰が顕著であるという傾向はそのまま題詠における旅寝の夢にあてはまる。

和歌表現では当然、旅寝の夢の内容が詳述されたりはしない。しかし、心細い旅寝の夢がいかなるものであるかは、みごとに類型化している。それは住み慣れた故郷・都への望郷である。勅撰集霧旅歌において夢の語を含む題詠歌に、故郷・都を詠み込んだ歌は、23首。夢と都（故郷）の関連は次のように分類出来る。

##### i 夢の中で都（故郷）に帰る。

534 草まぐらかりねの夢にいくたびかなれし都にゆきかへるらん  
(千載集)

521 草枕むすぶ ゆめち はみやこにてさむればたびのそらぞかな  
しき (新勅撰集)

1300 まどろめば ゆめ をみやこのかたみにてくさばかたしきい  
よぬぬらん (続後撰集)

963 行末を草の枕にいそげども猶ふる郷にかへる 夢 かな  
(新統古今集)

ii 夢では都は近い

520 はるかなるあしやのおきのうきねにも ゆめち はちかき宮こ  
なりけり (新勅撰集)

iii 夢は都にいても旅にあつても変わらない。

956 いはしろの岡のかやねをむすぶ夜も 夢 は都にかはらざりけ  
り (風雅集)

iv 眠れぬ旅寝で夢にさえ都 (故郷) を見ない。

907 あられふるのぢのささはらふしわびてさらにみやこを ゆめ  
にだにみず (続古今集)

866 ふるさつを見はてぬ ゆめ のかなしきはふるほどもなきさよ  
のなかやま (続古今集)

719 立ちわかれ宮こをしのぶ草枕むすぶばかりの 夢 だにもなし  
(続拾遺集)

583 故郷を出でしにまさるなみだかな嵐のまくら 夢 にわかれて  
(新後撰集)

1207 ふる里にさらばふきこせ峰のあらしかりねのよはの 夢 はさ

めぬと (玉葉集)

856 故郷にかよふ 夢 路もありなましあらしの音に松をきかずは  
(続千載集)

598 都おもふたびねの 夢 の関守はよひよひごとのあらしなりけ  
り (続後拾遺集)

771 旅ねする床の浦風さむき夜は都にかよふ 夢 ぞすくなき  
(新千載集)

773 都おもふすまの関路のかち枕 夢 をばとほす波のまもがな  
(新千載集)

886 宮こおもふ草のまくらの 夢 をだにたのむかたなく山風ぞ吹  
く (新後拾遺集)

904 夢 にだに逢ふ夜まれなる都人ねられぬ月に遠ざかりぬる  
(新後拾遺集)

v 都 (故郷) の夢は旅の慰め。夢を見たい。  
853 故郷の 夢 のかよひちせきもあばなにを旅ねのなぐさみにせ  
ん (続千載集)

798 ささ枕よはの衣をかへさずは 夢 にもうとき都ならまし  
(新拾遺集)

800 故郷にかよふただちはゆるさなん旅ねのよはの 夢 の関守  
(新拾遺集)

898 思ひねとしりてもせめてなくさむは都にかよふ 夢 ぢなりけ  
り (新後拾遺集)



964 いかねて都の夢もみしま野のあさぢかりしく露の手枕

(新統古今集)

vi 都(故郷)の人への思いが夢につながる。

602 おのづからふる郷ひともおもひいでば旅ねにかよふ夢やみ

ゆらん

(新後撰集)

1239 みなと風さむきうきねのかち枕都をとほみいも夢にみゆ

(玉葉集)

982 草枕おもひねにみる古郷の人はいかなる夢むすぶらん

(新統古今集)

vii 歌枕宇津山に都と夢を詠み込む。

818 都おもふうつの山道こえわびぬ夢かたとどる心まよひに

(新拾遺集)

さらに、『続後撰集』の次の例

1303 なれぬよのたびねなやます松風にこの里人やゆめむすぶ

らん

は、直接的な都回帰の表現ではないが、旅人にとっては安眠の妨げとなる松風をもとせず、土地の人は夢をみるのであろうかの意に、都恋しさが詠み込まれている。

時代的な傾向を知るために i ~ vii のパターンがどの歌集にあるかを一覧表にする(表II)。

表にしてみると同じパターンの詠歌が近い時代に集中していることに気づかされる。『千載集』『新勅撰集』『続後撰集』

《表II》

歌集	旅寝の夢と望郷の歌	i 夢の中で帰る	ii 夢では近しい	iii 夢は都にあって変わらない	iv 眠れぬ旅寝でえ都を見ない	v 都の夢は旅の慰め。夢を見たい	vi 都の人への思いが夢につながる	vii 歌枕宇津山に都と夢を詠み込む
千載	3首	1首	1					
新古今	6首	3首			1		1	1
新勅撰	4首	2首	1					
続後撰	4首	1首						
統古今	4首	2首						
統拾遺	3首	1首						
新後撰	6首	2首						
玉葉	4首	2首					1	1
続千載	11首	2首						
統後拾遺	4首	1首			1			
風雅	4首	1首						
新千載	3首	2首						
新拾遺	7首	3首			2			
新後拾遺	6首	3首			2			
新統古今	6首	3首			1	1		
新統古今	75	23	4	1	11	5	3	1

にみられた「夢の中で都(故郷)に帰る(i)」「夢では都は近い(ii)」という素朴な発想は『統古今集』以降は姿を消し、「眠れぬ旅寝で夢にさえ都(故郷)を見ない(iv)」というパターンが支配的になる。これにほぼ平行して、「都(故郷)の夢は旅の慰め。夢を見たい(v)」「都人への思いが夢につながる(vi)」という詠歌が見出せるようになる。

以上のように、『千載集』以降、すべての勅撰集において、

旅寝の夢の内容は、例外なく、旅人の現実とは対照的な住み慣れた場―都・故郷―に関わるのである。これから訪れる土地への期待感はなく、常に都を意識し、空間的・時間的距離を測って嘆く羈旅歌の姿勢は、まさにそのまま旅寝の夢にも反映しているのである。

## 5、おわりに

平安末期以来、多くの羈旅歌が、都という空間で詠まれた。観念の世界で旅のイメージを膨らませ、それが言葉によって紡ぎ出されていく。共有性・共感性をもつて都で醸成される旅にますます都回帰が強くなっていくのは当然であろう。それはまさしく勅撰集の旅寝の夢の表現に投影されている。

旅の経験の有無に関わらず旅の歌が詠めるのは、和歌という表現形態の制度的枠組みを考えれば、不思議なことではない。たとえば、勅撰集における『伊勢物語』撰取にはまさしくその枠組みの典型を見ることが出来る。東下りは後代の旅の表現に多大な影響を与えた。ただし、勅撰集には物語の主人公の特殊な旅の事情、流浪性、悲劇性は捨象され、共感性・共有性のある旅の情趣と望郷の念が受け継がれていく。

こうして確立された表現類型とそれにつわる伝統を踏襲し、想像の旅が造型された。

伝統的類型があるため、個人の旅把握・個性が肥大し、屹立することはなかった。観念・想像力が無限に広がって荒唐無稽になることもなかった。物語・故事・古歌の世界の共有で逸脱は制御されている。

勅撰集における題詠の定着及び旅寝の夢の類型化が意味するものは、羈旅歌の形骸化というよりも、旅の表現に関する日本文化の特質であろうと思われる。文学的次元の旅として造型された旅を人々は享受し、その情趣、伝統を味わい、旅の文化を作り上げていったのである。

旅の表現の制度的確立の範囲内で旅寝の夢もまた仮構された。勅撰集においては、それはひたすら都に通う夢・望郷の夢でしかなかった。散文の紀行に比較すると、勅撰集のこの特質はさらに浮き彫りになるのだが、この問題については稿を改めたい。

(教授 日本文学)

## 注

- ① H・E・プルチヨウ『旅する日本人 日本の中世紀行文学を探る』(武蔵野書院1983)
- ② 今関敏子『旅する女たち―超越と逸脱の王朝文学』(笠間書院2004)「序」及び「跋」
- ③ ②の拙著第三章「旅の造型―『伊勢物語』東下りと勅撰集」
- ④ 安田徳子『中世和歌研究』(和泉書院1998)

- ⑤ ④の著書第一章第一節旅歌の変遷一「実詠から題詠へ」
- ⑥ ④の著書第一章第一節旅歌の変遷二「旅人のいる風景」
- ⑦ 二十一代集の引用は「新編国歌大観」（角川書店）に拠る。
- ⑧ 『千載集』 羈旅歌の夢の詠はいずれも題詠である。

旅のうたとよみ侍りける

法印慈円

533 たびのよに又たびねして草まくらゆめのうちにも夢をみるかな

左兵衛督隆房

534 草まくらかりねの夢にいくたびかなれし都にゆきかへるらん

旅のうたとよめる

大中臣親守

540 あられもるふはのせきやにたびねして夢をもえこそとほざざり  
けれ

因みに、旅先で眠ることの非日常性を示す常套表現を、『千載集』以降の夢を詠み込む羈旅歌に探せば、次のようになる。

○旅寝・17例 仮寝・7例 浮寝・6例

○草枕・9例 梶枕・4例 浮枕・3例 草の枕・旅枕・嵐の

枕・波枕・2例 笹枕・露の手枕・1例

⑨ 引用は、『伊勢物語』（渡辺実校注・新潮日本古典集成）

⑩ ③に同じ。

⑪ 引用は『大和物語』（高橋正治校注・訳 新編日本古典文学全集

12『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『平仲物語』所収）に拠る。

⑫ ③に同じ。

⑬ ③に同じ。